

# 風土



つくつくほふし

神蔵器

杜甫よりも李白朝顔咲きにけり

ふるさとの土焦げくさし盆の過ぐ

花火消え一千万の目ののこる

魂棚の奥のおしやべり聞きもらす

草刈つて草の流るる七日盆

雀消す残暑十日の照り返し  
炎天にとつて返して涼氣過ぐ  
ふるさとはつくつくほふしつくほふし  
法師蟬いまがいちばん遠き過去  
秋ひでり園児に空をとぶ鯨  
青芒けふ吐く息の潔くあり  
新涼や子規の机に子規の貌



# 竹間集

同人作品



蟬の穴

小林輝子

風渡る蓮の浮葉を相寄せて  
捨て畑を風渡りゆく蛇葎  
臺動かず吾の動き出す  
山祇の森の古ぶや蟬の穴  
山鳩の声が森より青葡萄  
夜鷹啼く子規一宿の出湯かな  
鉦山も長屋も潰え蚩湧く

古団扇

小野寺節子

保育所の見張番かな青蛙  
一人居の素顔に親し古団扇  
くちなしの花の香余す雨雫  
ステツキと杖との違ひ日雷  
防犯に一役買つてゐる簾  
向日葵の風のおさけび遠海鳴り  
荒梅雨や被災地見舞ふつばさ欲し

恋花火

小林清之介

梅雨明け蟻の右往左往をまたぎ越す  
電柱の尿に尿かけ梅雨明け犬  
初蟬の遠音聴く児を羨みぬ  
見上げつつ手を握り合ひ恋花火  
赤々と闇にはじめて恋花火  
子供心今よみがへるみんなに  
法師蟬歌へば油蟬伴奏

京都祇園祭

田村すゝむ

男蝶女蝶と縄絡ませて鉾を組む  
エンヤラーヤ鉾曳き初めの綱欄む  
上る入るして宵山の鉾めぐり  
鉾に灯の入り通り名のわらべ唄  
山鉾に今日の夕日の離れゆく  
屏風祭に出合ふ洛中洛外囃  
今生源氏庭の一会に遊ぶ白桔梗

喜雨亭忌

瀬戸 悠

朝々の半熟たまご日雀鳴く  
こぬかあめ紙魚食む音と思ふべし  
短夜のエレベーターの昇る音  
形代に息ふきかけて旅にあり  
連弾のピアノの写す立葵  
端居してまたたく星をわが額に  
雨降らすひとひらの雲喜雨亭忌

夜の秋

塩田博久

万緑や寺領の奥のレストラン  
涼風の廻り来る滑川  
走り根に足とられたり梅雨茸  
山行きのストック選ぶ梅雨の明け  
果樹園に過ぎし日の恋青葡萄  
季語といふタイムマシンや巴里祭  
子規を読んで芭蕉に出会ふ夜の秋

暑氣中り

代田青鳥

暑氣中り電線右往左往かな  
暑氣中り鼻のてつぺん見えてをり  
点滴に通ふ日課や雲の峰  
居残りの兎を送り出す雲の峰  
日焼して房州弁の漢かな  
のどごしを水饅頭や沙羅の花  
今日寝ねて明日目覚むる沙羅の花

この年の

— 瀬戸 悠 —

水 無 月 の 闇 の 廊 下 に 誰 か ゐ る  
本 降 り と な り し 雨 脚 蟻 地 獄  
青 葉 潮 干 潟 侵 食 し て を り ぬ  
夏 つ ば め 車 中 ひ と 飛 び し て ゆ き ぬ  
遺 書 開 く 外 は 日 照 雨 の 花 ユ ツ カ  
う す も の の 立 ち 居 に 風 を 呼 び に け り  
母 の 死 に 堪 へ む 天 使 魚 ひ る が へ る  
う ぶ す な の 鳥 は 鱒 刺 風 に 乗 る  
ひ と と き を 蚊 屋 吊 草 の 蚊 屋 の 中  
七 夕 の 振 子 時 計 が 時 刻 む

さるすべりわが血たぎらせぬたりけり  
果てしなくつづく青空原爆忌  
雨を欲る草木盆の過ぎてをり  
鍵穴に夜明けのひかり今朝の秋  
訪ふ寺に千服茶臼糸とんぼ  
白萩や死者に言葉を慎めり  
秋蟬や海に出る道さがしをり  
鳥渡る現し身に時流れゆく  
夜深しの悪癖みみず鳴いてをり  
この年のカンナの丈もさだまりぬ

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

白日傘かざし「地獄の門」仰ぐ  
森田 節子

夕立来る鎌倉街道上の道  
梅雨寒の奥のみ灯す古書肆かな  
埋立てに名のみ橋やカンナ咲く  
白木槿満開バロツク美術展

立葵 村に一つの診療所  
奥山 絢子

羅の風をおこして来たりける  
魂のかむさりけりな夏の蝶  
炎天に背を屈みぬる農夫かな  
蛩の鳴かぬといふは悲しかる

肩巾ほど開けて商ふ海霧の町  
落合 絹代

白川の宵や立ち居の青簾  
万緑へ鉾町抜けて来たりけり

鉾立にバス停移動されぬたり  
蒲の穂に夕日とどまる隠沼

底紅や由来書に置く石一つ  
林 いづみ

冷奴十年変らぬ距離にをり  
一日の家出にからすうりの花  
万緑やクリスチヤンネームの草田男墓  
白く泛く流木の根や日の盛り

吊られぬて嬰の魚めくハンモツク  
柴田 久子

万全といふ高さかな青葉木菟  
赤ばかり使ふ待針蛇莓  
大雨の畳に拾ふ天道虫  
暑気中りして前山の曇りがち

◇特別作品（抄）◇

## クレヨンの青

生田恵美子

夏萩や淡き群なす鯉の稚魚  
梅雨の中届く真白き招待状  
涼しさや火より生まれし吹ガラス  
子の耳のピアス外して涼しかり  
緑さす喫煙室の椅子一つ  
西口へ長き地下道半夏生  
明易し眠れる街の中戻る  
トマトの香土間にてはがす雨合羽  
かぶと虫子はクレヨンの青が好き  
忌の近し日ごとにふゆる夏あかね

# 風土独語／神蔵 器



梅雨寒の奥のみ灯す古書肆かな

森田 節子

古書肆は古本屋と同じだが、古本屋と言われる店より、各種専門書や古典、貴重な古文獻など多く取り扱っている店のようである。こうした店は間口が狭く、奥行きが鰻の寝床のように深い。そして奥のどんづまりには、きまつたように昔の文学青年の夢の果のような老人が、お客などにおかまひなくむずかしい本を読んでいる。

作者はこの古書肆に特別に用があつたわけではなく、ただ通りかかっただけであろう。しかし何故か心惹かれて店の前を素通りすることが出来なかつた。それは身についた習慣的な行動であつたかもしれないし、ひよつとしたりとうに忘れていた心の奥の声を聞くことが出来るかも知れないのだ。

羅の風をおこして来たりける

奥山 絢子

飯田龍太の平成二年の作品に

涼風の塊として男来る 龍太

がある。この句の「男来る」の「男」は作者自身、まぎれもなく

飯田龍太その人であろう。涼風の一塊として俳壇に登場、自然にも人にもやさしくあたたかく、しかも涼しく爽やかに凜然としていのちの讃歌を詠いつづけ、この作品の二年後、平成四年には「雲母」を終刊、俳壇の第一線から爽やかに身を引いてしまった。さて、掲出の絢子さんの句も作者自身、一塊の涼風が女性であるので羅の風となつた。いかにもすがすがしい感じで、清楚であり且つ妖艶でさえある。その妖艶さを「風をおこして」でややおさえているのも作者の意志の強さであろう。人は男女を問わず己に涼風を持つことが何より大事なことである。

一日の家出にからすうりの花 林 いづみ

家出といつても別に深刻なものではなく、久々に解放された一日の旅を家出と自分から、言つて暗示をかけるように楽しんでゐるのではないか。

鳥瓜の花は夕方に開き、翌朝にはしぼむ。白い筒状花で、花弁の先は五裂し、さらに細かく糸状に裂けている。夕闇の迫る中に白く繊細な鳥瓜の花を見る時、家出と言つても家にのこして来た家人のことが気になつてゐるのだ。主婦の一日の家出。一夜きりの鳥瓜の花の美しさがせつない。(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

明易し星離れゆく音のして 高槻

浅田 光代

まなこ入れて麦藁帽子龍之介  
検診車蟬の大樹に横づけし

青蘆の頬打つ水郷めぐりかな

櫓の波のしづかに届く浮巢かな

ざざ降りの雨とくぐりて茅の輪かな 川崎

森田 節子

形代を納めし櫃の濡れて過ぐ  
青葉木菟根方の石の仏めく

塩をもて歯を磨くかな暑気中り

正午さす 安田 講堂雲の峰

鬼灯市すこし離れて屋台店 さいたま

須藤美智子

待ち合す日傘を高く挙げにけり  
蓮を見にカメラの列の後より

空港のロビーに七夕飾りかな

御台場の浮遊してゐる海月かな

七月に母生まれきて九十七 横浜

佐野つたえ

畳みゐる日傘に残る熱さかな  
火を入れし物だけ食す鷗外忌  
席ゆづり一礼を受く梅雨晴れ間  
衰態のルート 66 に夾竹桃

小倉祇園祭

福岡

武久 昭子

雲の峰競演太鼓天に打ち  
祭太鼓審査席より見てをりぬ  
祭の渦抜けて清張記念館  
濠沿ひの夜店自づと匂ひたつ  
山車を待つ小倉の駅の雑踏に  
万緑や牛飼ひの鈴鳴らしゆく  
大暑かな「只今風速三ノット」  
海の日や手箱に貝のこゑありて  
日の盛り浮き棧橋の軋みかな  
沙羅咲いて神奈川警察本部前

横浜

下山田美江